信州がりんごの栽培適地から外れる日を目前にして

元共和園芸農協代表理事組合長　岡澤賢朗

農林水産省が令和２年12月に発表した「農業生産における気象変動適応ガイド（りんご編）」で、地球温暖化による影響として高温・大雨・台風・暖冬を挙げているが、中でも高温はりんご栽培に最も影響が大きい。

私の住んでいる地域は長野市の南西部に位置し、約300戸の農家がほとんどりんご栽培だけを行っており、果実専門農協である「共和園芸農協」に結集をしているが、ここでも御多分にもれずりんご栽培への高温の影響が顕著で、特に赤色系りんごの着色不良と日焼果の発生が問題である。

長野市の最高気温の記録は今から30年前の平成６年（1994年）８月16日に観測された38.7℃であるが、この年の８月の気温は「長野地方気象台が1889年に統計を取り始めて以来の100年に一度の猛暑と干ばつの月」と言われ、35℃以上の猛暑日が13日、30℃以上の真夏日が15日、月間降水量が12mmという想像を絶する異常気象の月であった。だがこんな夏であっても、その年のりんご生産は大きく落ち込むことはなかった。

そうだとすると、今年８月の猛暑日は４日しかなく、さほど驚くことはないはずだが当時と比べるとりんごの着色問題をはじめ栽培環境は各段に悪化している。その理由は、単に７月、８月の夏だけが暑いのなら栽培上の工夫で対応可能だが、昨今は春から秋まで暑い。一例を挙げると長野市では今年25℃以上の夏日は４月に始まり10月までの７か月にわたって出現し、一年の半分以上が夏の気候になっていた。かつては「日本の四季」が今では「二季」になったと言われる所以である。

かかる状況において、行政、農協、農家も手をこまねいているだけではなく、長野県果樹試験場では「長野県における2040年代の気候温暖化を想定したりんご生産の実態解明」の研究に着手し、農家も栽培上の工夫で対応をはかっている。

しかし、予想を上回るスピードで高温化が進み、こうした対応では間に合わなくなっている。前述の「気象変動適応ガイド」には、「すぐに対応可能な対策は速やかに導入することが重要であるが、今後の気温上昇等によっては、効果を発揮しなくなる時期が来ることも念頭に置く必要がある」と記されている。言い換えると、りんごの栽培適地でなくなる前提で取組めと言うことだ。だが、「言うは易し、行うは難し」である。100年以上掛けてりんごの産地化、ブランド化を実現してきたものを生産者の高齢化・後継者不足が進行している中で、一朝一夕に他の高温に強い作物に転換と言ってもおよそ不可能な事である。

結局のところ、高温に強い品種が開発されるのを待ちながら、現在生産している40種類余のりんごの中から少しでも高温に強い品種、高温の影響が少ない黄色系の美味しい品種などを中心に、農家が極限まで頑張るしかないのである。

（おかざわ　けんろう）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/